

**<学内トピックス> 変革の波乗り : 三学期制
VS二学期制**

著者	橋本 幸男
雑誌名	筑波フォーラム
号	59
ページ	82-85
発行年	2001-06
URL	http://hdl.handle.net/2241/8306



変革の波乗り —三学期制 vs 二学期制—

橋本幸男
物理学系講師

大きな波

編集委員のKさんから電話をいただいた。筑波大学も三学期制から二学期制に移行を検討しているのだからそれに関する私見を述べよということであった。ながらく三学期制に身を置いてきた私には荷が重い。日々の生活に視点を置いて、創立以来の一大変化について思うところを書かせて頂くことにした。

昔の記憶

私の入学当時は、大学自体が建設途中であった。そこかしこで地面が掘り起こされ文字通り建設の槌音が響き渡っていた。英語のLL授業の宿題として持ち帰ったカセットテープには英会話とともに杭打ち機の爆音が録音されていて苦笑したのを懐かしく覚えている。

入学直後のオリエンテーションでは若く元気な先生方が「筑波大学は新構想大学であり、幅広く授業を取れるように配

慮してある。そのために1時限は75分であり1年を3学期に分けてある。」というようなことを説明されていた。一方で我々学生の間では、学園紛争への反省（反動）から学生が余計な運動へ流される暇がないようにした、というようなことがまことしやかに語られていた。

授業を取り始めると、3年次までは時間割が結構な割合で埋まっていた。確かに、広がりを持って授業を選択できていたのだろう。人文系の授業と総合科目は楽しみのひとつでもあった。

授業が多いということは、当然ながら試験の数も多い。しかも三学期制だからそれぞれの授業で3回ずつ試験を受けることになる。試験の数は多いことは多いが、試験の後に大型休みがくる一学期と三学期は区切りが深いので好ましいと思っていた。新学期が始まる4月、9月そして12月は気分を一新しての再スタートになるからであった。

記憶に残っている授業では演習・実習の時間が多し。演習・実習は公式な時間制では2時間続けての授業であるのだがそれらは第4, 5時限目であったために終わりの時刻は無関係であった。担当の先生方は大変だったと思うが、要領の悪い我々に実に良く付き合ってくださった。目下の問題のみならず関連する話題に(雑談を含めて)話が及ぶので興味をそそられ、楽しかった。

二学期制になると(1)

学生生活の思い出をたどると三学期制にそれなりに対応した生活をしてきたようだ。しかし、時は流れて今は21世紀。20世紀からの再構築をいたるところで求められている。筑波大学の二学期制への移行もそのひとつということになる。

二学期制に変わると当然ながら期末試験も3回から2回に減る。二学期制をとる大部分の大学の人々、そして完全移行後の人々にとっては当たり前でも、実際に三学期制を経験した身には新鮮に思われる。

その日常生活への影響はどのようであろうか。“(比較的)良い”効果から。学生さんの立場からは試験回数が減るのは好ましく思われる。比較的長いそれぞれ

の学期を自分のペース配分で過ごしやすくなる。授業を担当する立場からも作業量の減少という点は歓迎できる。試験にかかわる事務処理量の点においても同様であろう。

一方、“(比較的)良くない”効果としては上記の長所をちょうど裏返した例が考えられる。すなわち、自分のペースをつかめずにいると次の気分転換の機会までが(三学期制に比べ)長い時間になってしまう。また、ひとつの学期が長くなると中間試験が入るかもしれない。すると試験回数は年4回になり、期末試験3回の三学期制のときより増えることもある。

とはいえ、このようなことは些細なことであろう。学生さんは、現在の三学期制でも毎回の講義レポート提出、演習問題とそのレポート提出さらにことによると中間試験もしっかりこなし、さらに“筑波ライフ”をエンジョイしている(場合が多い)。若くしなやかな適応力の前では“3が2になって、だからどうした?”くらいのことではかない(と期待する)。ただし、温暖化傾向は今後もとどまることはないから、7月の蒸し暑さを乗り切る体力も必要となる。エアコンは是非欲しいところではある。

二学期制になると (2)

二学期制に移行して変化する日常的な項目のもうひとつは1時限の長さが75分から90分になりそれに伴う単位が3単位から4単位へ変わることである。このプラス15分はどのような効果を持つことになるのだろうか。いろいろ考えられる。

講義では、学習の基本である繰り返し入力として前回の要点を復習する時間を多めに取ることができる。また、レポートの要点解説、学生側からの直接の質問タイムとして使うという手もある。もちろん、内容の増加・充実・高密度化もあり得る。75分に詰め込んでいたか切り捨てて（諦めて）いた事柄に幅を持たせ、また、復活させることもできる。

同じことは演習の時間についてもあてはまる。現在の演習の時間は基本的に1時限（実習は2時限）である。昔のように長ければ良いとは思わないが、効率が重視される21世紀であっても“ゆとり”をもって授業が進むのは受ける立場のみならず授業をする立場からも好ましいと思われる。プラス15分が良い意味でのゆとりにつながって欲しい。

その先

二学期制への移行は、日常的な細々した変化を含んだ大きなうねりの一部分に

過ぎないのは明らかである。変化の潮流は広範囲に及ぶ。他大学の学期制と並行することで学生さんは他の大学の単位を（手続き上は）取りやすくなる。逆に、他大学の学生さんが筑波大の単位を取得するうえでも同様であろう。ITの進化によりネットワークを活用してその傾向はますます強まる。極端には、単位が互換になり学位も互換になり大学がグループ化して互換になり融合・統一という可能性もある。

しかし、ネットワークを生かして再構築を推進し効率を目指すのみの体制ではちょっと寂しい。是非、いろいろな面で多様性が生まれ育っていくようなゆとりをも備えた懐のより広い教育・学問の体制への再構築となれば魅力的である。

翻って、自分自身の日常を再構築しなければと思いつながら、これがなかなか難しい。さあ、チャレンジ！

（はしもとゆきお 物理学）

